



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	箴言における釈義上の問題 Exegetical Problems in the Book of Proverbs
Author(s)	勝村弘也 (Hiroya Katsumura)
<i>Citation</i>	キリスト教論藻 (KIRISUTOKYO RONSO) Bulletin of the Institute for Research of Christian Culture, No.26 : 13-42
Issue Date	1994
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# 箴言における釈義上の問題

勝 村 弘 也

## 1. はじめに

近年、欧米の旧約学界においては、知恵に関する議論が非常にさかんになっているが、そのひとつの中心が箴言の解釈にあることは確実である。特に、箴言1～9章において対照的に描き出されている2種類の女性のイメージが、いわゆるフェミニスト神学の台頭とも関連して脚光を浴びていること、さらに古代イスラエルの知恵の伝統の底流となっている創造神への信仰が人類による自然破壊の現実との関連で再評価されるようになったことなどが注目される<sup>(1)</sup>。またこのことと関連して、従来の文学史的研究、宗教史的研究に加えて、社会史的な観点からのテキストへの接近の試みも現れている<sup>(2)</sup>。箴言は「富と貧困」「労働」「隣人との交際」「政治」「性」など、いわゆる〈世俗的〉な事柄を多く扱っているわけであるから、これは当然であろう。ただし、〈世俗的〉という価値判断は、——箴言が祭儀に関心を示さないのは事実であるが——現代人の側から勝手に持ち込まれたものにすぎないが。

まさに百花繚乱の様相を呈している欧米の知恵文学研究に比較すると、わが国の学界の現状はまことにさびしい限りである。かつて月本昭男は『キリスト新聞』において、「西欧とは別の『知恵』の伝統に立つ東アジアのわれわれは、西欧の研究に学びつつも、今後は専門研究者、聖書の愛読者いずれを問わず、われわれ自身の信仰と知をもって、旧約聖書の『知恵』と直接取り組みたいものである<sup>(3)</sup>」と述べたが、名言である。たしかに欧米の研究者に追随することだけが、まったく別の知の伝統のなかに生きているわれわれの能ではない。しかし現実には、この領域の専門研究者が著しく少ないために彼方の研究の紹介すら十分になされていない<sup>(4)</sup>。旧約の知恵に関する研究がわが

国において不振である原因を筆者なりに考えてみると——旧約研究者がそもそも少数であるという一般的な事情は別にして——、その一因がわが国の神学教育のあり方にも存在するように思われてならない。筆者は、わが国の神学教育の実状について云々できる立場にはないが、もしも教育の重点が狭義の〈神学的な〉概念の習得といった所に置かれているとすれば、祭儀用語がほとんど出て来ないような〈世俗的な〉テキストが軽視されるのは当然のなりゆきである。このことは聖書の研究者あるいは将来の研究者のヘブライ語習得の過程とも微妙に関係してくる。語彙の獲得が最大の課題であると思われるヘブライ語のような言語を習得するにあたっては、教材の選び方はきわめて重大な意味をもつ<sup>(5)</sup>。ヘブライ語に関して、わが国にはもともと欧米のような長期にわたる語義研究や文法研究の積み重ねがない。それでも或る範囲の旧約テキストに出て来る語彙や〈神学的〉に重要と思われる語彙に関しては、かなり研究されてきた。しかし、従来きわめて〈世俗的〉と判断されてきた箴言のようなテキストを構成する語彙に関しては、ほとんどまったくと言ってよいほど研究の蓄積がない。したがってこの種のテキストは、いつまでも原典に近づくのに困難な慣れないテキストに留まるのである。

いわゆる「聖書の愛読者」が感じると思われる困難も結局は同じ所に根がある。たとえば基本的な知恵的語彙に関して、訳語が定まっていないのである。問題を箴言に限って言うと、新共同訳の箴言は、——しばしば見当はずれの訳語を新しく導入したために——この点に関して混乱を著しく増幅させただけの結果になっている。とりあえず日本聖書協会発行の口語訳(以下、協会訳)、新共同訳、日本聖書刊行会発行の新改訳、フランシスコ会聖書研究所訳「格言の書」(中央出版社刊)を読み較べて見られるとよい。どの訳文が比較的優れているかという評価はともかく、だれでもその訳文の著しい相違に驚くであろう。注意深い読者でなくてもこのような相違はいたる所に見出せるし、しばしばその程度がはなはだしいことに気付くはずである。これは旧約の他の文書とは比較にならない程である。これでは非専門家の愛読者諸氏は、内容のある議論を始めたくても始められない。

基本的語彙に関してすら訳語が定着していないと、今述べたが、現実は何が知恵文学の基本的語彙であるのかすらが認識されていないように思われる。特にマイナス評価が与えられているような概念、語句、表現に関しては、欧米においても十分な研究がなされていないが、わが国においてはまったくと言ってよいほど議論されていない。このような語句や表現に関しては、最近の出版物からの過剰としか思えない〈差別語〉追放の運動が事態をいっそう悪くしている。筆者は、いわゆる〈不快語〉や〈差別語〉に対して、作家や出版業界が一定の認識を持つことは当然であると考えている。しかしながら、わたくし自身の実に不快な経験から言うのであるが、厳密さを要求する古典の釈義や語義研究にまで圧力がかかるようなわが国の——特にキリスト教関係出版界の——現状は、異様としか言いようがない。このような状況においては、現代人から見れば実際に〈差別的な〉表現と判断されるような聖書の語句を逐語的に訳したり、それに厳密な語義解釈をしたりすることはまったく不可能になってしまう。(このような意味では、わが国で出版された聖書はすべて何らかの意味で〈検閲済み〉である。) 本論考においてあえて「愚か者」を取り上げたのは、このような事態に対する問題提起の意味もある。

手元の『旧約聖書神学事典』(教文館、1983年)には、「知者・知恵」の項目はあるが「愚者」はない(内容的にも記述がない)。『旧約新約 聖書大事典』(教文館、1989年)では、「知恵」「賢い」が十分に論じられているのに対して「愚か者」は、特に旧約の部分がひどく短い。ついでにこの日本語版聖書大事典の元になった BHH の「Tor, Narr」の項目を見ると、何と〈精神病〉のことが書いてある<sup>(6)</sup>。このような記述の問題性に気付いて内容を変更した日本語版編集者をこそ評価すべきなのだろうか。『新聖書辞典』(いのちのことば社、1985年)の場合には、「愚か者」も「愚者」の項目もない。「知恵」「知識」「知者」等の項目がかなり長いだけに奇妙である。『カラー版 聖書大事典』(新教出版社、1991年)は英語版からの翻訳であるが、興味深いことに巻末の索引で見るとこの書物には、fool も folly もないことがわかる。逆に

本文の「愚か者」の項目を引くと Raca とあり、説明はたったの 2 行である。「イエスはこの言葉を口にすることを咎めた」とある。おそらくこれが彼方の〈差別語〉追放運動の著しい成果なのであろう。これほどバカバカしい話はない。ついでに言うと、raca は『研究社新英和大辞典』にも『小学館ランダムハウス英和大辞典』にも見出すことが出来ない程の稀語である（アラム語起源の語：KJV のマタイ福音書 5・22 参照）。辞典類で例外的に「愚か」の項目が長いのが、1971 年に出版された——つまり〈ことば狩り〉以前の——『新聖書大辞典』（キリスト新聞社）である。

時間の許す読者は、聖書事典に「勤勉」「怠慢」に関連する項目があるかどうかを調べられるとよい。『旧約新約 聖書大事典』に「仕事」、『新聖書大辞典』に「労苦」の項目が見出せる程度にすぎない。まるで〈労働者〉がこのような事典を引くことがないかのような処置である。

知恵的な語彙に関する基礎的な研究が欠けていることの他に、特に箴言の場合、本文批評のレヴェルでの学者の意見の相違が非常に大きいことも、翻訳に頼る以外に方法のない一般読者の理解を困難なものにしている。箴言のマソラ本文には、独特の知恵的な用語や表現、稀語、文法的に問題のある箇所などがつぎつぎに出て来る。格言文学の場合に、このような難題を抱えながら正しい読みを確定することは非常に難しい。6～8 語でひとつの作品なのであるから文脈から判断しようとしても手掛りがない。単語ひとつの意味の違いで、格言全体の意味が大きく変わってしまう可能性が高い。解釈の手掛りに七十人訳を参照すると事態がさらに混乱することになりかねない。箴言の七十人訳には敷衍拡大が多く、マソラと共通の伝承に基づく〈原本〉からの逐語訳であるという保証はどこにもない。ともかく本論考では本文批評についても相当の紙面をさくことにする。複数の翻訳の解釈の相違が、本文批評の結果によるものであるのか、語義解釈の違いによるものであるのかを明らかにするのが、ひとつの狙いになっている。以上に述べたように、本論考においては、将来の箴言研究の基礎になるような諸問題が扱われる。実際に箴言のテキストに取り組んでいる、あるいは取り組もうとしている後学の

ために役立つことを願うものである。<sup>(8)</sup>

## 2. 知恵文学の基本的語彙とその用法

ここでは、箴言に現れる知恵文学に特徴的な語の中から、若干の語を選んで説明する。3.以下の論述との関係で重要な語を中心とした。

### 2.1.1. ムーサール (mūsāl)

この語は、動詞 *jsr* から派生した名詞である。動詞では、カル形、ニファル形等でも用いられるが、ピエル形として使用されることが圧倒的に多い。その意味は「しつける」「懲らしめる」である。名詞ムーサールの用例は、旧約全体で50回あるが、そのうちの30回が箴言で用いられている。1～9章に13回出現することも注目される。<sup>(9)</sup>

古代イスラエルにおいてもこどもをしつける役目が、まず両親にあったことは言うまでもないが、学校教育においては教師である賢者が時には「鞭」をもってその任にあたった(箴言13・24、22・15、23・13参照)。洋の東西を問わず、古代においては硬教育の理念が優勢であった。柱廊に囲まれたフォルムで開かれていた学校で鞭打たれている生徒の姿が、ポンペイから発掘された壁画に描かれている。<sup>(10)</sup> 旧約には「学校」という語は出て来ないが、グレコ・ローマン世界において周知のこのような形式の学校が、王国時代のエルサレムにも存在したと推定されている。<sup>(11)</sup> 1章20節以下の「広場」「町の門の入口」で呼ばれる知恵の姿には、このような事情が反映しているものと考えられる(8・2以下をも参照)。

箴言中のムーサールの訳語を調べてみると「教訓」「教」(協会訳)「訓戒」「懲らしめ」(新改訳)「諭し」(新共同訳)「教育」(フランシスコ会訳)等となっている。ムーサールはまず、体罰を含むような教育活動をさすから「懲らしめ」「訓練」「指導」と訳すことが出来る。このようなムーサールを比喩的に、神によるイスラエルの民の訓練の意味で使った例もある(申命記8・5、エレミヤ書2・30、5・3等。箴言3・11をも参照)。ムーサールと結合

して用いられる動詞を調べてみると、「聞く」（箴言 1・8、4・1等）、「得る」「受け入れる」（箴言 8・10、エレミヤ書 7・28等）が目立つ<sup>(1,2)</sup>。ムーサールを「受け入れる」の場合には、教師の与える教育活動全般を受け入れるの意味もあろうが、「聞く」の場合には、ムーサールは明らかに教えのことば、つまり「訓戒」「諭し」をさしている。英語の instruction には、教育活動だけでなく教えのことばや内容の意味が含まれるので都合がよい。

ムーサールには、英語の discipline のように教育の成果としての「規律」や「規律正しい生活」の意味も含まれる。生徒の受けた訓練の経験は内在化されて、持続性をもつひとつの生活態度にまで高められなければならないのである。フォン・ラートが指摘しているように「この場合には、ギリシャ語の παιδεία (παιδεία) の意味に近づく<sup>(1,3)</sup>」。4章13節の「ムーサールを捕えて離すな、彼女を守れ、彼女はおまえの命なのだから」（ここではムーサールが女性として人格化されている！）や「ムーサールを捨てる」（13・18、15・32）「ムーサールを愛する」（12・1）の場合には、たしかにこのような意味が含まれているように思われる。

## 2.2. 動詞 jkh

G・Liedke は、この動詞の基本的な意味を「何が正しいことであるかを確定する<sup>(1,4)</sup>」としている。たいていはヒフィル形で「戒める」「訓戒する」の意味で用いられる（箴言での用例は、10回）。これから派生した名詞トーカハト (tôkahat)「訓戒」は、旧約全体で24回出現するが、そのうち16回が箴言で用いられている。ムーサールと並行している用例が多いが（5・12、10・17等）、もとの動詞の意味から考えて、ことばによる教育の意味合いが強い。協会訳は、動詞を「責める」「戒める」、名詞トーカハトを「戒め」「懲らしめ」と訳す。新共同訳は、動詞をほとんど「懲らしめる」、トーカハトを「懲らしめ」と訳した。新共同訳がムーサールを「諭し」と訳していることはともかくとして（これを機械的にやっていることは問題だが）、トーカハト＝「懲らしめ」はまったくいただけない。新改訳が動詞を「しかる」「責める」、名詞を「叱責」としているのは適切である。

### 2.3. タハブロート (taḥbulôt)

旧約で6回しか用例がないが、そのうちの5回が箴言にある(1・5、11・14、12・5、20・18、24・6)。語源は確かではないが、七十人訳のキュベルネーシス(κυβερνήσις)が示しているように、元来、船舶の舵取りの技術を意味する語であったと思われる<sup>(15)</sup>。旧約の言う知恵とは、ひとがこの世界で賢く生きていくために必要な舵取りに他ならない<sup>(16)</sup>。箴言ではタハブロートは、政治的・軍事的領域における「指揮」の意味でも用いられる(11・14、20・18)。なおギリシャ語のキュベルネーシスは、新約のコリント人への第一の手紙12章28節でも用いられている(「管理者」と訳されている語)。

### 2.4. トゥーシーヤー (tûšjā)

旧約に12回出現するが、ヨブ記(6回)と箴言(4回)に用例は集中している。この名詞の語源が明らかではないために、翻訳者泣かせの難解な語になっている。新共同訳は2章7節のこの語を「力」と訳す。たしかに語根 jšh「在る」を想定して、これから「能力」を意味するとする解釈もある(McKane等)。しかしながら、七十人訳はソーテéria「救い」、ヴルガタ訳は salus「健康」「安寧」となっている。18章1節の七十人訳を見るとカイロスになっており、Plögerはこれにしたがって「機会」の意味に解釈している。ウガリット語 tšyt からは「勝利」「成果」が推定される。KBL第3版は、Gemserの「企てに成功をもたらすもの」という解釈や、Pedersenの「ベラーカー(祝福)のように行為のもつ生産的な力、また同時にそのような行為自身をさす」と言う説明を採用している。現代語にはうまく対応するものがないダイナミックな概念がこの語には含まれている。「よい結果を促すような(知恵の)働き」をさすのであるから「成功」「有能さ」とか「確かな知恵」(協会訳)と訳してよい。

### 2.5. ペティ (pätī)、動詞 pth

名詞ペティは「若くて経験の浅い者」「未熟な者」をさす。動詞の pth(旧

約での用例28回)、「未熟さ」を意味する名詞ペティ(箴言1・22)、「軽薄」ペタイユート(p'tajjūt)(9・13)と関連する。同一の語根をもつこれらの語の用例の合計は48回であるが、そのうち21回(うち動詞5回)が箴言に集中している。動詞としてはピエル形での用法が目立っており、その意味は「口説く」である。<sup>(17)</sup>出エジプト記22章15節には「処女を誘惑して、彼女と寝る」という用法がある。このように異性をことば巧みに口説くような場合にも用いられるが(士師記16・5参照)、一般に隣人に対して詐欺を働くことを意味する(箴言16・29、24・28)。ホセア書2章16節(協会訳14節)では、比喩的な意味で神がイスラエルを口説くの意味で用いられている(エレミヤ書20・7をも参照)。このような動詞の意味は、十分な教育を受けていない未熟な若者が、誘惑に弱いという事実と関係している。単純で未経験な若者を、簡単に誘惑や詐欺に引っ掛からないように訓練することが知恵の教師たちの役割なのであった(箴言1・20以下の勧告を参照)。箴言でのペティの最初の用例は1章4節にある。これを協会訳は「思慮のない者」、新改訳は「わきまのない者」と訳していたが、新共同訳は「未熟な者」とした。適切な訳語である。しかし新共同訳は他の箇所では「浅はかな者」(9・4、16、21・11、14・18、19・25等)と訳している。

現代人は「若さ」を単純にマイナス価値であるとは考えない。むしろ「若さ」はどちらかというとき積極的価値なのであって、青年を未完成ではあっても将来性に富む力の溢れる存在として把握する傾向がある。(多少、皮肉な見方をすれば、現代資本主義には誘惑に弱い若者を——同時に浮ついた「熟年」をも——消費へと駆り立てるために「若さ」をことさら高く価値付ける必然性があるのだとも言えそうである。)しかしながら旧約は、啓蒙思想とフランス革命以後のそのような人間観を知らない。古代イスラエル社会の伝統的な価値観からすると、「若い」=「未熟」=「無学」=「誘惑に弱い」=「単純軽薄」=「愚か」となるのである。だれでも知恵の教育をまだ受けていない者は、無知であり愚かなのである。なお9章13節に登場して若者を誘惑する女を特徴づけるペタイユートには、巧みに口説く女であると同時に軽薄な女の意味が含まれる。

## 2.6. 愚かさを表す語

2.6.1. T.Donald は、箴言、ヨブ記、詩篇、コーヘレトの各書において使用されている「愚かさ」「愚行」「愚者」を表現する用語に関して、その〈意味領域〉(semantic field)を調査した。<sup>(18)</sup> Donald が列挙しているこれらの21種類の語の上記4文書における分布を見ると、箴言にはエヴィール('awil)、イッヴェレト('iwwälät)、ケシール(k'sil) など11種類の語が使用されている(これには当然ペティとペタイユートも含まれているが、すでに2.5.で説明した)。ヨブ記には愚かさに関連する語の用例が非常に少ないこと(4種類、6回のみ)、コーヘレトには箴言で頻繁に使用されているエヴィールとイッヴェレトの用例がまったくなく、逆に箴言には用例のない skl 系統の語が合計13回も用いられていること等が、注目される。

### 2.6.2. ケシール

箴言には、愚かさを表現する語の種類が多く変化に富んでいる。まず旧約の知恵文学に特有の語としてケシール「愚かな」がある。この語は、詩篇で3回用いられている以外には、箴言(49回)とコーヘレト(18回)に用例が集中している。箴言での用例のうち13回までもが、反対語「賢い」ハーカム(hākām)と対照的に用いられていることからわかるように(コーヘレトにおいても同様の傾向が認められる)、知恵のある者、賢者とは正反対の型の人物を描写するために用いられる。このことと関連して、典型的な愚者の特徴を列挙する26章1～12節の〈愚か者シリーズ〉においてケシールが連続して11回も使用されていることが注目される。ケシールの語根には ks l が想定されるが、その元の意味は「太っている」「肥えている」であろう。名詞ケセルが人体の太った部位である「腰」を表すこともここから説明される。おそらく肥満であることの否定的な側面から、「ぐず」「のろま」のような意味が派生し、「賢い」とは逆に実生活における能力の欠如を表す「愚かな」の意味に転じたものと思われる。<sup>(19)</sup>

旧約の知恵が、元来、実生活の中で起こるさまざまな問題を巧みに処理し、適切に行動する能力を意味したことに照応して、「愚かな」ケシールはそのような能力に欠けること、人生航路の舵取りを誤ることを意味した。この語

が、伝統的な意味での知恵的用語であることは、箴言10章以下の〈ソロモンの第一詞集〉と25章以下の〈ソロモンの第二詞集〉に用例が集中し、後代の神学的著作である箴言の第一部には4回しか用例がないことによっても示される。<sup>(あ)</sup>なお、さらに後代の著作コーヘレトにおける用法を見ると、定冠詞が付いて名詞化された場合が多くなっている。これは日本語の「ばか」が「ばかな人」の意味に転じたことと類似している。

### 2.6.3. エヴィールとイッヴェレト

どちらの語も同一の語根 'wl から派生したと思われるが、旧約にはそのような動詞はない（アラビア語「凝固する」「太る」と関連するのだろうか）。語源は確かではないが、その意味するところは明瞭である。エヴィールが「愚か者」ないし形容詞の「愚かな」であるのに対して、イッヴェレトは「愚かなこと」「愚かさ」を意味する。<sup>(20)</sup>新共同訳は、ほとんどの箇所ではエヴィールを「無知な」、イッヴェレトを「無知」と訳しているが、適切な訳語ではない。

エヴィールの旧約での用例26回のうち19回が箴言にある。しかも、〈ソロモンの第一詞集〉で13回も用いられており、特に10章のキーワードのひとつになっていることが注目される（用例4回）。イッヴェレトの用例はさらに極端に箴言に集中している（23回）。他には詩篇で2回用いられているだけである。やはり〈ソロモンの第一詞集〉での用例が多く（16回）、特に14章には7回も出現する（この章にはエヴィールも2回出現）。〈ソロモンの第二詞集〉では4回使用されている。このようにエヴィールとイッヴェレトは、ともに箴言の比較的古い伝承層に見出される。

### 2.6.4. ナーバルとハサル・レーブ

ナーバル (nābāl) は、箴言で3回用いられている（旧約全体での用例は、人名以外では18回）。この語の意味に関しては、ふつう、知恵文学においては「定められた秩序に反抗する者」をさすと説明されている。<sup>(21)</sup>しかしながら、この語の基本的な意味については、いろいろと議論されている。筆者はナーバルが「けち」「吝嗇」の意味を含むことを先に論じたことがある。これ以上の説明は省略する。<sup>(22)</sup>

ハサル・レーブ (ḥ<sup>a</sup>sar-lēb) は、箴言に特徴的な表現であって、「思慮の足

りないこと」を意味する。「欠けている」「少ない」「減少する」を意味する動詞のḥāsēr の用例は、箴言に2回(旧約全体で25回)しかないが、形容詞のハーセールḥāsēr の用例は12回と非常に多い(旧約全体で14回)。この語は「何が欠けている人」あるいは「欠けていること」を表現するが、大部分がハサル・レーブとして熟語的に用いられている(箴言で10回)。レーブ「心臓」は、旧約ではしばしば知的な活動の座と考えられていた。したがってハサル・レーブ「心が欠けている」は、情緒的な意味で「冷淡である」ことをさすのではなく、「思慮が足りないこと」を意味する<sup>(23)</sup>。しかしこれを狭義の知力の不足と考えてはならない。軽率で慎重さを欠く行動に対して用いられているからである(箴言6・32、17・18)。怠慢と関係している場合もある(24・30)。またハサル・レーブは、未熟で誘惑に弱い若者の特徴である(6・32、7・7。9・4、16をも参照)。

なお、箴言28章16節にはハサル・テブーノート「英知に欠ける」という表現がある。

2.6.5. 箴言の描き出す愚者の姿は、現代人が考える知力の劣る人のイメージとは一致しない。愚者は寡黙な人ではなく、むしろ多弁である。しかしその語る事柄は愚劣であり、破滅を引き起こす。愚者は自分の愚かさを反省せず、愚かさを繰り返すのみである。

賢者は、知識を蓄える。

だが愚者の口は、間近にせまる滅び(10・14)。

賢者の舌は、知識をよく使う。

だが愚者の口は、愚かさを湧き出す(15・2。15・14、12・23、13・16、29・11をも参照)。

賢者の冠は、その富。

だが愚者の愚かさは、(ただの)愚かさ<sup>(24)</sup>(14・24)。

犬が自分の吐いたものに戻るように、

愚者はその愚かさを繰り返す(26・11)。

愚者を救いようがないと言う場合には、彼らに知力が足りないからではなくて、むしろ彼らが教師の戒め、忠告をどうしても聞き入れないからであり、そのことによって行動の改善の見込みがないと判断されているからである。つまり知恵的な教育が極めて困難な者、ないし教育不可能な者が、愚か者と呼ばれているのである（14・24、17・10、23・9）。つぎの詞は、辛辣である。

愚か者を臼の中で、麦穀（？）といっしょに杵で突いたとしても、  
その愚かさは、彼から離れない（27・22）。  
馬にむち、ろばにくつわ、  
愚か者の背には杖（26・3。10・13をも参照）。

家畜のように外からの強制的な訓練や制御が愚者には必要である（詩篇32・9をも参照）。なぜなら、愚者は自己欺瞞の中で生きているので（14・8参照）、内面に秩序がないのである。<sup>(25)</sup>詩篇の中の次のことばは、このことを神学的に表現したものである。

愚か者（ナーバル）は、その心の中で言う、  
「神はいない」と（詩篇14・1）。

#### 2.6.6. レーツ (lēṣ)

レーツは、特に知恵的な語である。箴言で14回使用されている以外には、詩篇1篇1節とイザヤ書29章20節にしか用例がない。協会訳と新改訳では「あざける者」、新共同訳では「不遜な者」と訳されている。語根 lṣ の基本的な意味は「おしゃべりをする」であろう。動詞としての用例は、旧約全体で7回あるが、そのうち4回が箴言にある（3・34、9・12、14・9、19・28）。レーツは箴言20章1節では、酒を飲んだ時の大言壮語と関連して用いられており、このようなおごり高ぶった大言壮語は、精神的未熟さに対応していると考えられた。1章22節では、レーツィーム（複数）がペターイム「未熟な者」（ペティの複数）およびケシーリーム「愚か者」（複数）と並行して用いら

れている。また、しばしば「賢者」と対照的に用いられる（9・8、13・15・2）。レーツが知恵を求めても得られないのは（14・6）、おしゃべりばかりして教師の言うことを聞かないからであろう。このようなレーツを「ほら吹き」と訳してもよい。レーツの思い上がった振る舞いについては、21章24節が語っている。

高ぶり、横柄な者、その名はほら吹き（レーツ）。  
非常に思い上がって行動する。

同じ語根から派生した語にラーツォーン (lāṣōn) がある。「大言壮語」「ほら」の意味で、旧約において3回用いられている（箴言1・22、29・8、イザヤ書28・14）。

## 2.7. 破滅を表す語

2.7.1. R.N. Whybray は、〈ソロモンの第一詞集〉と〈ソロモンの第二詞集〉で用いられている「破滅」を表す語彙として47種類を数え上げている。<sup>(26)</sup> その中で比較的用例の多いものを挙げると、以下の通りである。まず動詞としてアーバド ('ābad) 「没落する」「滅びる」、ナーパル (nāpal) 「倒れる」「落ちる」、slp のピエル形「ひっくり返す」「曲げる」がある。名詞では、メヒッター (m<sup>h</sup>ittā) 「恐怖」「破滅」、マーウェト (māwät) 「死」、ツァーラー (ṣārā) 「災難」「艱難」、ラーアー (rā'ā) 「災い」「不幸」が比較的よく用いられている。これらの語彙の中でアーバド、ナーパル、マーウェト、ツァーラー、ラーアーは、もともと旧約での用例が非常に多い語であるが、slp のピエル形 sillēp とメヒッターは、箴言に特徴的な語である。

2.7.2. 語根 slp の基本的な意味は、「ひっくり返す」であろう（アラビア語の salafa は「まぐわで耕す」である）。転じて、「こと」ないし「ことば」を「歪曲する」の意味でも用いられるようになった。旧約では動詞のピエル形で7回用いられているが、そのうち箴言での用例が4回ある（13・6、19・3、21・12、22・12）。22章12節の日本語の訳文は以下のようになっている。

主の目は知識ある者を守る、  
しかし主は不信実な者の言葉を敗られる（協会訳）。  
主の目は知識を見守り、  
裏切り者のことばをくつがえす（新改訳）。  
主の目は知識を守り、欺きの言葉を滅ぼす（新共同訳）。

これらはすべてマソラからの翻訳であって、相違は主として問題の動詞をどのように解釈したかによって生じている。ヘブライ的な思惟においては、行為とその行為によって引き起こされる結果とは一連の事象として見られる（いわゆる〈行為・帰趨連関〉 Tun-Ergehen-Zusammenhang）から、ひとつの動詞が或る行為とともにその結果をも意味することがあり得る<sup>(27)</sup>。ヤーウェが欺瞞的な行いをする者の「ことば」ないし「していること」を「くつがえす」ということは、そのような不誠実な者を滅ぼされるということに他ならない。なお、節の後半の主語は「ヤーウェの目」（複数）ではなくて、「ヤーウェ」自身であろう。動詞が3人称単数形になっている。この点では協会訳が正確である。箴言には、slp から派生した名詞 sālāp の用例もあるが（11・3、15・4）、その意味は「歪曲」ないし「欺瞞」であるとされる。どちらの用例でも破壊や荒廃に関連していることが注目される。

2.7.3. メヒッターの語根は、*htt* であってその基本的な意味は、セム諸語の類縁関係にある動詞から「破壊する」「打倒する」であると考えられる。アッカド語には「恐怖」「狼狽」を意味する名詞 *hātu(m)*、*hattu(m)* もあり、ヘブライ語での意味に近い<sup>(28)</sup>。ヘブライ語の動詞での用例は56(57)回あるが、そのうち36(37)回までが預言書にある。カル形での意味は「恐怖に満たされる」である。箴言に動詞の用例はない。しかしメヒッターの旧約での用例11回のうち7回までが箴言に集中している。しかもすべて〈ソロモンの第一詞集〉にある。これらのメヒッターを「滅び」「滅亡」と訳してさしつかえない。

2.7.4. それにしても何という多様な仕方で、箴言は破滅について語っていることか！ 箴言では、Whybray の数えた47種類の表現以外に、比喻を使って破滅について語られることもあるから、すべてを網羅すればさらに多様

になるだろう。以下に、比喩的表現のなかから若干の例を挙げる。なお、「落ちる」および「ともしびが消える」は、Whybray が数えた47種類の表現に含まれている。

穴を掘る者は、自分がその中に落ちる (npl)。

石を転がす者の上に、石が(転がり)返ってくる (26・27)

欺きとったパンはうまい。

だが、あとで彼の口は砂利で満たされる (20・17)。

父と母とを呪う者には、

そのともしびが、闇のはじまりとともに消える (20・20。13・9 参照)。

次の例では、破滅が迫ってくる様子が「つむじ風」の到来にたとえられている。ここには Whybray が挙げていない表現エード ('ēd) 「災難」、パハド (paḥad) 「恐怖」、ツーカー (ṣūqâ) 「苦悩」も含まれている。

それでわたしもおまえたちの災難の時に笑い、

おまえたちの恐怖が来る時にあざ笑ってやろう。

おまえたちの恐怖が [嵐のように<sup>(い)</sup>] 来る時に、

おまえたちの災難は、つむじ風のようにやって来る、

おまえたちの上に艱難と苦悩が来る時に (1・26~27)<sup>(29)</sup>。

箴言に破滅に関連する表現がこのように豊富であることは、この書が経済的な意味での家の没落や社会的な名誉の喪失を含む人生の破局に大きな関心を寄せていたことを雄弁に物語っている。箴言が単に社会の上層部の人々の文学であって〈身分道徳〉のようなものを呈示しているだけであるとは言えないが、全体として保守的傾向をもっていることは否定できない。社会変革が期待されているのではなくて、まったくその逆なのである。なお、経済的な意味での没落については、箴言の労働観との関連で別に考察を必要とするであろう<sup>(30)</sup>。

### 3. 難解な語句、本文批評等

#### 3.1. 3章8節のショル (šor)

新改訳は、3章8節を「それはあなたのからだを健康にし、あなたの骨に元気をつける」と訳し、「からだ」に注をつけて、直訳すれば「へそ」であると説明している。この節には、稀語が3つもあるためにだいたいの意味は分かるが、正確に訳すことが困難である。まず、節の後半のšiqqûjは「飲ませる」「水をやる」から派生した名詞で「飲料」の意味である。ここから「元気を回復させるもの」とか「薬」(McKane)の意味になると解釈されている。新共同訳はここを「あなたの骨は潤されるであろう」としている(ヨブ記21・24参照)。この節の冒頭の語 rip'ût は、旧約のハバクスレゴメノンであるが、ベン・シラの知恵(シラ書)38章14節に用例がある。「治療」あるいは「薬」の意味とされる。ここまではあまり問題がない。論争されているのは、レシヨルレカー (l'šorrākā) である。七十人訳は「あなたのからだに」と訳しているので、これに基づいてヘブライ語リシュエーレカーやリブサーレカーを推定する提案がある。新共同訳の「あなたの筋肉」は、リブサーレカー (libšārākā) を想定したものであろうが、あまりにも安易な読み変えである。ウルガタ訳には umbilico tuo (あなたのへそ) とあるのでマソラ本文が誤っているわけではない。KBL 第3版を見ると、šor としてこの語の説明がなされている。旧約には、他にエゼキエル書16章4節と雅歌7章3節でしか用いられていない。エゼキエル書16章4節での意味が「へその緒」であることに異論はない。雅歌7章3節についてはこれまたその解釈をめぐる論争されている。この語が逐語的には「へそ」であるとしても、新共同訳の「秘められたところ」が示しているように、vulva の婉曲語法だとする意見と文字通り「へそ」をさすのだという意見が対立している。<sup>(31)</sup> 箴言3章8節の場合には一応「へそ」でよいとしても何らかの説明が必要になる。胎児にとってへその緒は、生命の維持にかかわる。そこから「身体の基」のような意味が派生するのだろうか。McKane は、アラム語のšrrt から「力」「健康」を推定している。

### 3.2. 3章13～15節における探求と発見

3章13節以下は、教訓や勧告というよりもむしろ〈知恵の賛歌〉になっている。協会訳は、冒頭の13～14節を以下のように訳している。

知恵を求めて得る人、  
悟りを得る人は、さいわいである。  
知恵によって得るものは、  
銀によって得るものにまさり、  
その利益は精金よりも良いからである。

13節は、詩篇1篇1節のアシュレー・ハーイーシュ「……の人は、さいわいなり」と非常によく似た表現のアシュレー・アーダームで始まっている。新共同訳は、このような文体に注意して「いかに幸いなことか」を文頭に配置して訳している。問題はこの節の動詞にある。前半の動詞マーツァー (mqʿ) の意味は「見出す」である。新改訳が「知恵を見いだす人」と訳している通りである。この動詞は、しかしながら知恵の〈探求〉を前提にしているから、協会訳が誤っているのでもない。

13節後半の単に「得る」と訳された動詞 pwq のヒフィル形は、旧約全体で7回しか用例のない語であって説明を要する。<sup>(33)</sup>7回のうちの4回までが箴言で用いられているが(他に箴言8・35、12・2、18・22)、これらの用例を詳しく見ると、12章2節以外の3箇所ではすべてマーツァー「見出す」との組み合わせになっている。8章35節は、3章13節と同様、知恵の探求と発見に関連しており、18章22節は「良い妻」の発見に関連する。つまり動詞 pwq は、或るものないし或ることが、見つけられ出会いを引き起こされることに関連して使用されている。また、3章13節以外の3例(8・35、12・2、18・22。ベン・シラの知恵4・12をも参照<sup>(34)</sup>)では、この発見ないし出会いによって人がヤーウェからの恩寵を体験することが問題になっている。したがって、3章13節が言わんとしている事柄は、以下のようになるであろう。ひとは知恵を探求し、その結果として知恵を見出し、知恵と「英知」ないし「悟り」(テ

ブナー)に出会う。このことによってひとは同時にヤーウェからの恩寵に遭遇し、これを体験することになるので、このようなひとは「さいわいなひと」と呼ばれるのである。

14節前半を直訳すると「なぜなら、彼女のもうけは、銀のもうけよりもよい」(新改訳参照)である。「もうけ」(sahar)は明らかに商業用語であって、商売によって獲得された利潤を意味する(箴言31・18、イザヤ書23・3、18等、旧約での用例7回のみ)。節の後半の「彼女の収益」(テプーアター)という表現も同じ意味合いで使われている。知恵の獲得を金銀や宝石などの財貨の獲得にたとえることは、知恵文学の常套手段である(箴言8・19、16・16、20・15、25・11以下、ヨブ記28・15以下等)。知恵が金銀や宝石にたとえられる理由は、これらが高価であるという事実のみによるのではなく、これらが忍耐強い探求の結果として発見されるものだという事実にもよる。ヨブ記28章の長い教訓詩や箴言2章4節はこのことをよく示している<sup>(35)</sup>。しかし箴言3章14節では、金銀が直接地下から掘りだされて精練される物資と考えられているのではなくて〈流通〉するものになっている。これは、この〈知恵の賛歌〉の著作年代が、旧約ではかなり遅い時期の貨幣経済が発達した時代であったことと関係している。この時代には利潤が自覚的な追求の対象となっていたのである<sup>(36)</sup>。協会訳が15節で「宝石」と訳している語の正確な意味は分かっていないが、「真珠」(新共同訳、新改訳)あるいは「珊瑚」(フランシスコ会訳)と考えられている。いずれにしても商人がインドなどの遠隔地から運ばれてくるものを探して手に入れるものであった(マタイによる福音書13・45の天国のたとえを参照)。

この〈知恵の賛歌〉において知恵が女性として人格化されていることは、あまり明瞭ではないが、金銀宝石が古代オリエントの恋愛詩においてよく用いられている比喻であることには注意する必要がある<sup>(37)</sup>。さらに17節の「歓喜」(no'am)「平安」(šālôm)や18節の「命の木」の表象が、雅歌と関連することが注目される<sup>(38)</sup>。

### 3.3. 3章25～26節

この箇所の協会訳は以下のようになっている。

あなたはにわかに起る恐怖を恐れることなく、  
悪しき者の滅びが来ても、それを恐れることはない。  
これは、主があなたの信頼する者であり、  
あなたの足を守って、  
わなに捕われさせられないからである。

26節は、1章26節以下のイメージとよく似ている。ここでもパハド「恐怖」および「来る」が用いられている。1章27節で「嵐」と訳しておいたショーアー (šō'a) が、ここでは「滅び」と訳されている。問題は、26節前半の b<sup>e</sup>kislākā をどのように解釈するかである。ケセル (kāsāl) は、すでに説明したように「腰」を意味する (2.6.2.参照)。そこから「そば」の意味が生じたと解釈されることがある。ウルガタ訳は、in latere tuo となっている。新共同訳の「主があなたの傍らにいまし」は、これに従ったものである。しかしながら、このようなケセルの用法は他にはない。ケセルが「信頼」や「確信の根拠」を意味していると考えられる用法はかなりある。たとえば、詩篇78篇7節は、協会訳では「彼らをして神に望みをおき」となっているが、マソラから直訳すると「彼らが神にその信頼を置き」となる (他にヨブ記8・14、31・24参照)。「太っている」を意味する同一の語根 ksl から、否定的な意味の「愚かな」と肯定的な意味の「信頼」が派生したのはおもしろい。なお、七十人訳は3章26節の問題の箇所をまったく別の仕方で解釈しているが採用できない。

### 3.4. 4章7～8節

7節のマソラ本文をそのまま読むのは困難である。どのように解釈しても結局はこじつけにならざるをえない。Toyなどは、テキストが破損しているとしてすべて削除してしまう。しかしながら、この部分は知恵のすばらしさ

を高揚した気分で語っているところであるから、正確に翻訳することは困難でも、同語反復になっている理由は理解できる。したがって削除というわけにはいかない。意味が通らないのは承知で無理遣りマソラを訳すいただきたい次のようになる。

知恵のはじめ、知恵を獲得せよ。

おまえのすべての獲得したもので、分別を獲得せよ。

まず、前半の「知恵のはじめ」が孤立している。「知恵の初めに」(新改訳)ならまだ何とか分かるが、マソラには「に」がない。「知恵のはじめ」が主語で「知恵を獲得せよ」が述語だろうか。協会訳や新共同訳は、そう読もうとしたのであろう。箴言には「ヤーウェを畏れることは、知識のはじめ」(1・7)や「知恵のはじまりは、ヤーウェを畏れること」(9・10)という有名な句があるから、たしかにこれにならって解釈したくなる。しかしその場合には「獲得せよ」という命令形では困るので、マソラの母音符号を変更して「獲得すること」と不定法にする必要がある(F. Delitzschによる)。しかし「知恵のはじまりは、知恵を獲得すること」では、あまりにもひどいタウトロジーである。McKaneは、才覚を働かせて、ここには2つの文があるのだとする。「はじめに知恵があるのだ。(だから)知恵を獲得せよ」。しかしこれもかなり苦しい解釈である。単に「で」と訳した後半の前置詞bの意味もあいまいでよく分からない。「あなたのすべての財産をかけて」(新改訳)「これまでに得たものすべてに代えても」(新共同訳)も不可能ではないが、「おまえが獲得したものすべてを用いて」と解釈することも出来る。

8節では協会訳で「それを尊べ」と訳されている冒頭の語サルセラハー(sals<sup>o</sup>lähā)の語義に関しては議論されている。語根はsllに違いないが、動詞のピルペル形での用例は、ここだけである。エレミヤ書6章9節の名詞サルシラー(salsillā)「(ふどうの)つる」から類推して「からみつく」「愛撫する」が考えられる(新共同訳の採用した解釈)。この場合、8節全体にabb'a'のキアスムス(交差配列)が認められることになり、「彼女を愛撫する」が

末尾の動詞「彼女を抱く」と並行関係にあることになる。しかしながら、sl1の意味には「揚げる」「掲げる」があるから、この節の2つ目の動詞「高める」とほぼ同じ意味だと考えることも出来る。つまり「彼女(=知恵)を高く評価せよ、そうすれば彼女もおまえを高めてくれる」と読むのである(協会訳、F.Delitzsch、Plöger等の解釈)。なお、この箇所を知恵の女性としての人格化に関連して、9節の「花輪」と「冠」が婚礼で花嫁が身につけるものを暗示すると見る者がいる。しかし「花輪」と「冠」は「彼女」が「おまえに授ける」ものである。また「抱く」といっても、必ずしも恋人たちの抱擁だけが考えられているのではないだろう。保護を与えるとか、互いに栄誉を分かち合うとか(オリンピックの表彰式での抱擁を想起せよ!)のイメージも含まれているのである。

### 3.5. 4章15~19節

ここには箴言によく出て来る「道」の比喻がある。3章では、23~26節に旅の比喻があり、31節で悪人の「道」に言及されていた。4章11節から「道」が再度登場する。ただしここは「知恵の道」である。14節から「邪悪な者の道に入るな」との警告が始まる。15節もこのような警告のつづきになっているが、気にしないで「いいかげんに扱っておけ」(pr')「離れよ」(šth)「通り過ぎよ」('br)という3つの命令と「その中を通るな」との禁止命令が畳みかけるように発せられている。悪人の道とは、何の係わりも持たないようにと勧められていることになる。14節後半の動詞「歩む」('šrのピエル形)は、用例の少ない語であるから説明しておく。この語は旧約全体で7回しか用例がない<sup>(39)</sup>。それも、イザヤ書に4回、箴言に3回(他に9・6、23・19)と偏りが見られる。イザヤ書では「導く」の意味でしか使われていない(ピエル形およびプアル形)。この動詞から派生した名詞の「歩み」には、7回用例がある(Even-Shoshanの数え方による)。ただし、詩篇に5回、ヨブ記1回、箴言1回(14・15)とこれも偏っている。「歩む」「歩み」の意味で用いられる場合には、知恵的表現と見てよいであろう<sup>(40)</sup>。なお、箴言9章6節の「歩む」がカル形であることから、4章14節のこの動詞もカル形に読むべきではない

かと KBL 第3版は提案している。

16～17節は、悪人の生活を描き出すことによって、先の警告を理由付ける機能をもっている。彼らは悪事を働かないと不眠で苦しむことになるというのである。16節後半には「(ひとを) つまずかせないと、彼らの眠りは取り去られる」とある(ただし「つまずかせる」はケレーに従う読み方)。彼らにとって悪事は、まさに日常茶飯事である。なぜ悪事を働かないと眠れないことになるのかと言うと、彼らは邪悪な行為によって生活の糧を得ているからである。「邪悪のパンを食べ、暴虐の酒を飲む」は、しかしまた、彼らが悪徳のために生きていることをも意味している。

つぎの18～19節は、「義人の道」と「邪悪な者の道」を「光」と「闇」にたとえて対照的に描く。この2つの節の位置に関しては議論されている。18節は、接続詞 *w*<sup>e</sup> で始まっており、19節が先にあった方が対立関係を表す接続詞としてうまく説明できる。<sup>(41)</sup> たしかに、邪悪な者の道について語っている19節は、17節と内容的に連続する。BHS は、17節の終わりの語が *w* (ワウ) でおわっていることにも注意して、18節冒頭のワウを重複誤写 (dittography) として説明できるとしている。つぎに、マソラの意味をよく汲んでいると思われる新改訳を挙げておく。

義人の道は、あけぼのの光のようだ。

いよいよ輝きを増して真昼となる。

「あけぼのの光」と訳されている所は、「光」に名詞の「輝き」が結合した形になっている。「輝き」(nogah) は、シリヤ語などでは「明けの明星」を意味する。旧約での用例を調べてみると、太陽の輝きの場合が多いが(イザヤ書62・1、サムエル記下23・4等)、火(イザヤ書4・5)、月(イザヤ書60・19)、星(ヨエル書2・10)に関しても用いられている。ここは明らかに太陽のイメージで使用されている(イザヤ書60・3と類似)。直前に「義人」があるが、「義」と「太陽」のイメージは結びつく(イザヤ書62・1参照。またマラキ書3・20 [4・2] には「義の太陽」という表現がある)<sup>(42)</sup>。「いよいよ輝

きを増して」と訳されている箇所は、「歩く」(hlk)と「光る」('wr)を意味する動詞の分詞形がワウで結合して、ひとつの観念を構成している。ここの分詞は動名詞的に解釈されるので結局「ますます光り輝く」の意味になる(Delitzschの注解参照。サムエル記上2・26、サムエル記下3・1参照)が、太陽が東から西へと進むイメージも入っている。「真昼となる」は、「真昼に至るまで」を意識したもの。太陽は、正午をはさんで左から右へと移動する。正午に太陽の輝きはもっとも強烈になる。したがってここでは、あけぼのから正午に至るまでの太陽の晴天に輝く様を「義人の道」の繁栄の比喩として使っているのである。

なお、19節は、ヨハネ福音書12章35節に影響を与えている。

### 3.6. 4章26節の動詞 pls

この箇所の訳を比較すると以下のようなになる。

あなたの足の道に気をつけよ、

そうすれば、あなたのすべての道は安全である(協会訳)。

どう足を進めるかをよく計るなら

あなたの道は常に確かなものとなろう(新共同訳)。

おまえの足の歩みに心を配り、

おまえのすべての道を堅く固めよ(フランシスコ会訳)。

Let the path of thy feet be smooth,

Let all thy roads be firm (C. H. Toy).

この節の前半の動詞 *palēs* (ピエル形命令法) を、名詞のペレス「天秤」(箴言16・11参照) から「測る」「量る」とする解釈が古くから存在した。新共同訳はこの説を復活させたことになる。最近の解釈では、アッカド語等のセム諸語を参照して「注意する」「気をつける」のように訳す者が多い。この説は、箴言5章6節と21節の同じ動詞の用例の場合にもうまく適合するように思われる(古くは Driver, Kautzsch が、最近では McKane, Plöger 等が採用)。

しかし、イザヤ書26章7節と詩篇78篇50節にも同じ動詞がある。これらはアッカド語の *palāšu* やシリヤ語の *p<sup>e</sup>laš*等を参照して道を「切り開く」の意味に解釈されている。名詞「天秤」から「平らにする」を推定する意見もある。すでに Delitzsch は、箴言4章26節に関して、「前進を妨げるような障害を除いて道を備えよ」の意味であると注解している。5章6節と21節に関しても再考の必要があろう。

### 3.7. 5章15～16節

この箇所が男性に向って性的な放縦を戒め、自分の妻との性的交わりを楽しめと勧めていることは間違いない。しかし、注解者によって細部の解釈は異なっている。とりわけ、16節をマソラのまま読むことが困難なために色々な提案がなされている。マソラから直訳すれば以下のようなになる。

おまえの水溜めから水を飲め、  
おまえの井戸の中から流れを。  
おまえの泉は、外へと溢れ出る、  
水の支流が、ちまたに。

15節のボールは「水溜め」、ベエルは「井戸」と訳される。ボールは岩を穿って作られ雨水を受けて貯える。それに対してベエルは、生ける水を供給する。16節のマアヤーン「泉」も地表面へと湧き出る水をさしている。「水の支流」と訳した表現は、水が分かれて流れることをさしており、特に灌漑のために人工的に作られた運河の流れを意味する（箴言21・1、詩篇1・3参照）。15節のノーズリーム「流れ」には動詞の分詞形（複数形）が用いられている（エレミヤ書18・14、詩篇78・16、44参照）。雅歌4章15節では、「泉」「井戸」「流れ」が連続して用いられ、花嫁のメタファーになっている（12節をも参照）。箴言5章15節の「飲め」に関しても、雅歌8章2節を参照して性的交わりを楽しむことを意味していると解釈される（雅歌5章1節をも参照）。15節が男性に対して自分の妻との愛の交わりを勧めていることは分かるが、16節

はどのように解釈すべきであろうか。新共同訳は、マソラのまま訳しているが、これでは解釈を放棄したことになる。七十人訳には節の文頭に  $\mu\eta$  があるので、これに基づいて、①文頭にヘブライ語の禁止を表すアルを補って「……するな」と解釈するか、②ペンを補って「……しないように」「さもないと」と解釈するかの可能性が生じる。たとえば、Plöger は、「さもないと、おまえの泉は外へと流れでる」と訳している。つまり、おまえが妻と楽しまないでおろそかにすると彼女は外で浮気をすることになると言っていることになる（Gemser も同様の解釈）。この場合「水溜め」「井戸」「泉」など水に関係する語は、すべて妻に関する比喻と考えられる。

しかし、七十人訳には  $\mu\eta$  のないテキストもあり（アレクサンドリア写本等）、最初からこの語があったのかどうかは疑わしい。そこで協会訳、新改訳は、マソラを正文とするが、これを疑問文ないし反語に解している（リングレン、Delitzsch, Toy, McKane, Camp 等の解釈）。この場合でも、問題は残る。McKane やワイブレイ等は、15節の「水溜め」「井戸」を女性の比喻と考え、16節の「泉」「水の支流」を男性の比喻と考える。この場合には16節の水は男性の精液をさし、家の外で精力を使うなどと言っていることになる。しかしながら、このような仕方では類義語の意味している事柄が変化するという解釈はすっきりしない（18節には再度マーコール「泉」の比喻が出て来ることにも注意）。果たして、これらの「水溜め」「井戸」「泉」「水の支流」等をアレゴリカルに解釈するのが正しいのであろうか。これらの語はもっと漠然と〈渴きを癒すもの〉とか〈快樂の源〉を意味しているのではないか。Toy は、そのように考えている。この場合でも、16節は男性が家庭の外で快樂を追い求めることを戒めていることに変わりはない。Camp は、箴言全体の中で泉のイメージが「生命」を象徴していることに注目する（13・14、14・27、10・11等）。この線で箴言5章15節以下を解釈すると、水のイメージが単に女性を表しているだけでなく、女性と男性との愛の関係をも表していることになる。この愛から生命が来るのであって、この生命は神からの贈り物なのである。<sup>(43)</sup>

(つづく)

## 注

以下に列挙する注解書に関しては、逐一参照箇所を指示することを差し控えた。

松田明三郎著『箴言』日本基督教団出版局（1967）

フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書 格言の書』中央出版社（1983）

R・N・ワイブレイ著／松浦大訳『箴言』ケンブリッジ旧約聖書注解15、新教出版社（1983）

リングレン著／有働泰博訳『ATD旧約聖書註解15 箴言・伝道の書』（1991）

F. Delitzsch, Proverbs, Ecclesiastes, Song of Solomon: tr. from the German by M. J. Easton, Eerdmans (reprinted 1978)

Crawford H. Toy, The Book of Proverbs: ICC, Edinburgh (1899)

A. Cohen, Proverbs, Sontino Books of the Bible (1946, revised 1985)

Helmer Ringgren, Sprüche Salomos: ATD 16/1 (1962)

Berend Gemser, Sprüche Salomos: HAT, Tübingen (1963<sup>2</sup>)

R. B. Y. Scott, Proverbs/Ecclesiastes: The Anchor Bible (1965)

J. Terence Forestell, Proverbs: The Jerome Biblical Commentary, Prentice-Hall (1968) 495-505

William McKane, Proverbs, The Old Testament Library, The Westminster Press (1970)

R. N. Whybray, The Book of Proverbs, Cambridge (1972)

Otto Plöger, Sprüche Salomos (Proverbia): Biblischer Kommentar Bd. XVII (1984)

また、特に次の辞典を丹念に調べたが、本文の中ではKBL第3版と略記し、頁数は指示しなかった。L. Koehler und W. Baumgartner, Hebräisches und Aramäisches Lexikon zum Alten Testament. Dritte Auflage, Leiden (1967-1990)。

- (1) J・ブレンキンソップ著／左近淑・宍戸基男訳『旧約の知恵と法』ヨルダン社（1987）。G・フォン・ラート著／勝村弘也訳『イスラエルの知恵』日本基督教団出版局（1988）。最近の研究に関する案内図は、Horst Dietrich Preuß, Einführung in die alttestamentliche Weisheitsliteratur: Urban-Taschenbücher Bd. 383 (1987) によって与えられる。J. L. Crenshaw, ed., Studies in Ancient Israelite Wisdom, New York (1976)をも参照。

箴言1～9章に関する研究は非常に多いが、特に注目すべきものを以下に挙げる。

R. N. Whybray, Proverbs VIII 22-31 and Its Supposed Prototypes: VTS XV (1965) 504-514; Christa Bauer-Kayatz, Studien zu Proverbien 1-9: WMANT 22, Neukirchen-Vluyn (1966); Othmar Keel, Die Weisheit

spielt vor Gott: Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie(1974) 1-66; Phyllis Tribble, Wisdom Builds a Poem: The Architecture of Proverbs 1:20-33: JBL 94 (1975) 509-518; Jean-Noel Aletti, Proverbes 8, 22-31. Etude de structure: Biblica 57(1976)25-37; Jean-Noel Aletti, Seduction et Parole en Proverbes I-IX: VT 27 (1977)129-44; Gale A. Yee, An Analysis of Prov 8, 22-31 According to Style and Structure: ZAW 94 (1982) 58-66; Claudia V. Camp, Wisdom and the Feminine in the Book of Proverbs: Bible and Literature Series 11, Almond (1985); Bernhard Lang, Wisdom and the Book of Proverbs, New York (1986); Gale A. Yee, 'I Have Perfumed My Bed with Myrrh': The Foreign Woman ('išša zara) in Proverbs 1-9: JSOT 43 (1989) 53-68.

- (2) Claudia V. Campの研究(上掲書)が注目される。Camp, Wise and Strange: An Interpretation of the Female Imaginary in Proverbs in the Light of Trickster Mythology: Semeia 42 (1988) 14-36は、人類学的アプローチと言える。さらに、Karel van der Toorn, Female Prostitution in Payment of Vows in Ancient Israel: JBL 108/2 (1989) 193-205は、いわゆる〈神殿娼婦〉ではない〈ふつうの〉女性が、古代イスラエル社会において宗教的・経済的な理由から売春を行なう可能性があったことを主張するもので、従来の〈公的宗教〉の側だけから宗教史を見ていこうとするような研究方法に対して一石を投じている。また、アタルヤ・ブレンナー著/山我陽子・山我哲雄訳『古代イスラエルの女たち』新地書房(1988)が、高く評価される。
- (3) 論説「知恵文学」研究の現在『キリスト新聞』1989年9月23日号。
- (4) 最近では、『日本語版インタープリテーション』(1993年1月号)No.19が、「富と貧困」に関連して箴言を扱っていることが注目される。
- (5) 一般に古典語教育が近年ますます内容希薄になって行く状況にあることは確実と思われるが、仮にヘブライ語学習に相当の時間がかけられたとしても——これは本人の心がけ次第では可能である——、教材の選び方によって実際には相当の差が生じる。いわゆる知恵文学は、いずれにしても旧約の中でもっとも難解なテキストに属すると思われるが、いわゆる古典的学習書を使ってヘブライ語を習得した場合には一層、難しく感じられるだろう。例文や練習問題の語彙や文体に偏りが著しいからである。最近の欧米のヘブライ語教科書では、語彙や文体に偏りが生じないように工夫がなされている。たとえば、Ernst Jenni 著のヘブライ語教科書巻末の聖書参照箇所の一覧を見よ。
- (6) Biblisch-Historisches Handwörterbuch Bd.3., Göttingen (1966) 2008f.
- (7) The Interpreter's Dictionary of the Bible には、Slothfulness, Sluggard の項目がある。

- (8) 筆者には、先に月刊誌『聖書と教会』（1991年10月～92年9月）において箴言の釈義を連載する機会が与えられ、近刊の『新共同訳 旧約聖書注解II』（日本基督教団出版局刊）には、拙論「箴言注解」が含まれることになっている。さらに1993年10月の日本基督教学会学術大会（於：神戸女学院大学）では「箴言1～9章における女の声」と題して口頭発表を行なった。しかしながら、これらの機会ではいずれも色々な制約があったために、テキストの読みに関する細かい議論を割愛せざるを得ないことが多々あった。ここでは、そのような欠けを幾分かでも補うことにする。なお論述の都合上、上掲の既発表の釈義と部分的に重複するところがあることを断っておく。
- (9) このような統計に関しては、Abraham Even-Shoshan (ed.), *A New Concordance of the Old Testament*, Jerusalem (1983)を活用した。
- (10) ナポリ博物館所蔵。Stanley F. Bonner, *Education in Ancient Rome*, Berkley (1977) 118. さらに、Lang=注(1) 30, Figure 3.参照。
- (11) ベン・シラの知恵51・23に、はじめて「学舎」（ペート・ハンミドラーシュ）という語が出て来る。G・フォン・ラート=注(1) 36頁。Lang=注(1) 29-33.
- (12) *Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament*, Bd.I, 738ff.を参照した。さらに、伊藤利行著「ギリシャ語旧約聖書における *παιδεία* について——聖書における形成の研究(1)——」『基督教学研究』第2号 (1979) 91頁以下参照。
- (13) G・フォン・ラート=注(1) 89頁。
- (14) ThHAT, Bd.I, 730-32.
- (15) Eduard König は、語根 *h b l* を推定している。Gemser, Plöger 参照。
- (16) 勝村弘也著「ソロモン王の知恵、その歴史的事実に関する一考察」『歴史学と考古学』（1988）真陽社。1頁。
- (17) KBL 第3版 *pth* 参照。ThHAT, Bd.II, 495ff.
- (18) Trevor Donald, *The Semantic Field of "Folly" in Proverbs, Job, Psalms, and Ecclesiastes* : VT 13 (1963) 285-292.
- (19) ThHAT, Bd.I, 836ff.
- (20) ThHAT, Bd.I, 77ff.
- (21) ThHAT, Bd.II, 26ff. W.M.Roth, NBL: VT 10 (1960) 394-409参照。
- (22) 拙論「けちんぼうの飽食」『聖書と教会』1992年4月号、33頁以下。G.Gerleman, *Der Nicht-Mensch. Erwägungen zur Hebräischen Wurzel NBL: VT 24* (1974) 147-158参照。
- (23) J. Pedersen は、ヘブライ語の「心」*レーブ*を行動力や行動しようとする意志と関係させて理解しようと試みた。ペデルセン著／日比野清次訳『イスラエル』キリスト教図書出版社(1977) 138頁以下参照。たしかに日本語でも「心が弱い」

「心がかくじける」などという表現をする。新共同訳のハサル・レーブの訳語「意志の弱い」は、このような理解によるものであろう。したがってこの訳語をまったく誤っていると考えることは出来ないが、「思慮が足りない」と訳した方が、文脈には適合する。とにかくレーブは、現代人が考える意味での「意志」の器官でも「知性」の座でもなく、もっとファジーな存在である。

- (24) この節の後半は、マソラが正文を伝えていないとして最初の「愚かさ」を「花輪」に変更するなどの提案がなされている。しかし、完全なタウトロギーが、「愚者」のどうにもならない様を表現しているとも読める。
- (25) フォン・ラート注=(1) 107 頁参照。
- (26) R.N.Whybray, *Wheath and Poverty in the Book of Proverbs: JSOT Supplement Series 99*, Sheffield (1990) 24f.
- (27) フォン・ラート注=(1) 192 頁以下参照。
- (28) *Theological Dictionary of the Old Testament*, ed. by G.J. Botterweck and H. Ringgren, Vol.V, 277ff.
- (29) この箇所の釈義は、拙論「知恵の嘲笑」『聖書と教会』1992年8月号、32頁以下参照。
- (30) 拙論「箴言における富の問題」『聖書の学び』第17号、NHK 学園 (1992年1月) 3～5 頁において簡単なスケッチを試みた。
- (31) F.Delitzsch, *Commentary on the Song of Songs*, 123は、「へそ」とする。さらに G.Gerleman, *Ruth/Das Hohelied: BK XVIII (2.Auflage 1981) 197*は、エジプト美術から類推して「へそ」だとする。しかし Roland E. Murphy, *The Song of Songs: Hermeneia*, Fortress Press (1990) 182は、文脈からこのような解釈は不可能だと考えて、訳語に「谷間」を当てている。M.H.Pope, *Song of Songs: Anchor Bible 7c* (1977) 617f.は、vulva 説。
- (32) *ThHAT*, Bd.I, 923.
- (33) Even-Shoshan は、pwq の用例を 9 回数えているが、そのうちの 2 回 (イザヤ書 28・7、エレミヤ書 10・4) は「よろめき歩く」の意味で、辞書では、別の動詞として扱われている。
- (34) ベン・シラの知恵の訳者は、ギリシャ語への翻訳に際して、もとのヘブライ語の動詞の意味がよく分からなくなっていたらしい。村岡崇光訳「ベン・シラの知恵」『聖書外典偽典 2 旧約外典 II』375頁参照。
- (35) ヨブ記 28 章については、フォン・ラート注=(1) 222 頁以下参照。
- (36) 拙論「働く女性」『聖書と教会』1992年6月号、32頁以下参照。
- (37) Wolfram Herrmann, *Gedanken zur Geschichte des Altorientalischen Beschreibungsliedes: ZAW 75* (1963) 176-197.
- (38) 雅歌 1・16、7・7、8・10 参照。「命の木」については、7・8 以下の比喩以

外にも雅歌にはいたるところに木が出て来る。Camp=注(1) 101f.参照。

- (39) Even-Shoshan は、2種類の'sr を混同して数えているので KBL 第3版にしたがって数え直した。コンピューターを使うとこのような認識の誤りがよく起こるので注意。
- (40) 「歩み」アーシュールの詩篇での用例は、以下のようである。17・5、37・31、40・3、44・19、73・2。詩篇37、73篇は明確に知恵的である。
- (41) Delitzsch, Toy, Gemser 等の意見。BHS も一応支持。
- (42) 詩篇112篇3～4節は、義人に輝く光について語る。義が神から放出される宇宙論的な力であることについては、ThHAT, Bd. II, 507-30のK. Kochによる綿密な解説を参照。また、拙著『詩篇注解』リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ(1992)97頁。『旧約聖書に学ぶ』日本基督教団出版局(1993)74頁以下、79頁以下参照。
- (43) Camp 注=(1) 202ff.参照。

#### 補注

- (a) 箴言の書は、以下のように大きく5つの部分に区分される。
- 第一部 1～9章：バビロン捕囚後の編集者が、勧告文や教訓詩をこの書の冒頭に配置した。知恵はしばしば女性として人格化され、神学的に解釈されている。
- 第二部 10・1～22・16：合計375の賢者の詞からなる〈ソロモンの第一詞集〉。この部分に古くからの伝承が含まれることは確実である。
- 第三部 22・17～24・34：30の勧告とその付録。23・11までの勧告には、エジプトの「アメンエムオペトの教訓」との著しい並行関係が認められる。
- 第四部 25・1～29・27：〈ソロモンの第二詞集〉
- 第五部 30～31章：四部分からなる付録。31・10以下に有能な妻に関するアルファベット歌がある。
- (い) マソラのケレーにしたがって「嵐」と読まれる。